

## 山陰の風土、宍道湖の風景

吉 田 薫

20世紀最後の昨年、3冊の本の作成した。『風景風土的随想』（著書）、『HEARN'S LAKE SHINJI』（編、小冊）、『ハーンの宍道湖』（前掲本の訳、小冊）であり、いずれも山陰の風土や風景をテーマとしている。読者には一般市民を想定しているが、土地の性状や景観に関わることの多い技術分野の人に通じやすい部分も多いと思われる。

ここでは、山陰の風土と宍道湖の風景を、これらの著作に基づいて解説することとする。

### 『風景風土的随想』 ——山陰は暗いのか——

副題は、この本の一項目で、山陰の風土と風景の考察の第一歩としている。

多くの計画書等で山陰の地域特性を述べるが、概ね地形や植生、歴史や文化財に詳しく、天候や気候については表やグラフを用いて簡単に説明するのみである。

しかし実は、山陰の特徴は気象分野において顕著であり、それらが多方面に大きく影響を及ぼしていることを知らねばならない。

日照時間は4～10月に他地域と比較しての順位は高く、反対に11～3月は下位に位置する。3月中旬より急に明るく、また、11月中旬から急に晴れ間が少なくなることは山陰の住人誰も実感していることであろう。すなわち、山陰には「陽期」と「陰期」の別がある。

表1. 気象データ (1961～1990)

日照時間 (4～10月)			日照時間 (松江)			1mm以上雨日 (松江)			降水量 (松江)		
順	地 点	時間	月	時間	順	月	日数	順	月	mm	順
1	西 郷	1354	1	72	54	1	18.5	54	1	151.1	56
2	高 松	1347	2	84	54	2	15.9	55	2	136.5	58
3	岡 山	1314	3	144	55	3	14.7	55	3	126.8	46
4	足 摺	1312	4	181	15	4	11.2	42	4	124.0	25
5	和歌山	1306	5	216	4	5	9.9	28	5	119.6	20
6	松 江	1285	6	172	8	6	11.2	15	6	196.0	26
7	浜 田	1283	7	188	9	7	10.5	16	7	268.3	55
8	松 山	1280	8	215	13	8	8.2	13	8	145.4	29
9	青 森	1278	9	153	23	9	12.3	50	9	216.3	43
10	新 潟	1275	10	160	24	10	10.7	52	10	135.0	39
:			11	111	51	11	14.0	54	11	137.8	50
:			12	84	53	12	16.5	54	12	137.9	53
58	京 都	1069	4～10	1285	6	4～10	74.0	38	4～10	1204.6	34
59	熊 谷	1056	11～3	495	54	11～3	79.6	54	11～3	690.1	54
60	前 橋	1043	年間	1782	48	年間	153.7	54	年間	1894.8	45
61	軽井沢	1020									
62	東 京	1019									
63	八丈島	1019									
64	宇都宮	1013									
65	水 戸	1012									
66	尾 鷲	1007									
67	大 島	956									

(注) 元データは『理科年表』による。

降水が年間を通じて安定的であることは日本海型気候の特徴だが、日照時間との関係で興味あることに気がつく。それは、日照時間の順位が高いのにも関わらず、降水量や雨日数は多いことである。つまり、日が照る割には雨がよく降るということであり、天気が変わりやすいことを示している。「朝鮮やかな国」（韓国・朝鮮）とか、「晴れの国」（岡山）とか、それぞれの気候に基拠した物言いがあがる。いずれも気候の安定性を窺わせる。対して当地方でよく耳にするのは、「弁当を忘れても傘を忘れるな」である。天候の変動を表すという解釈が適当であろう。ただし、変化が小1時間というような短い時間で繰り返されれば、逆に傘を忘れることもないわけで、実感からすれば、そのサイクルは半日程度ということであろう。

かつて芥川龍之介は、「松江はあらゆる水を持っている」と評したが、年間を通じて湿度が高位安定していることも山陰の風土の特徴である。芥川は言及しないが、空気中にも湿気として豊かな水がある。太平洋岸との違いは冬場に顕著で、彼地では冬場は肌を切る冷たい外気となる。

以上のような気候上の特質が風景に反映される。すなわち、多様な雲の出る空、もやがかかった空気、遠くで青くなりやすい山（瀬戸内よりも確実に）、水に潤った緑、変化の多い湖の風景等である。

したがって、「出雲」という名称も古代人の鋭敏な感性がとらえた当地の特筆すべき特徴であると思いたい。雲の形や色で「雲占い」をしたとまではいわないが……。

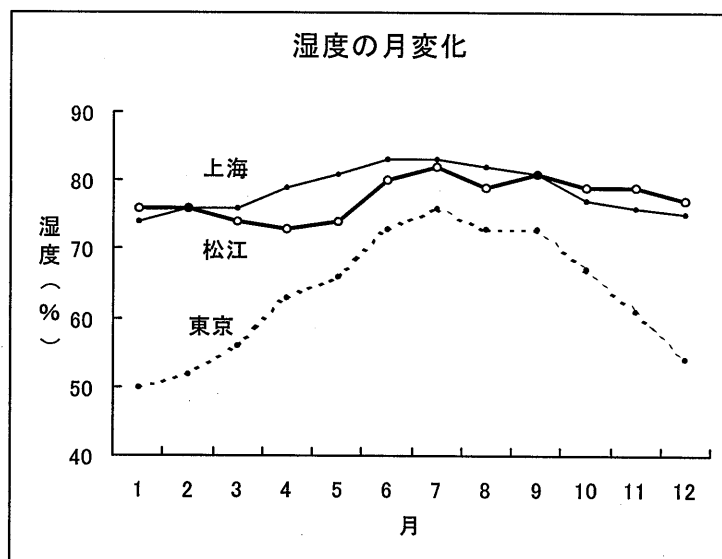


図1. 湿度の月変化

## 『HEARN'S LAKE SHINJI』 & 『ハーンの宍道湖』

前者が原文で後者が拙訳である。

ラフカディオ・ハーンは明治23年(1890)に来日し、同年8月末より1年2ヵ月半の間、英語教師として松江で暮らした。昨年は来日110周年であり、松江でも記念行事が行われた。松江市滞在は短い間であったが、「怪談」の構想を得たり、生涯の伴侶を得たりと、極めて充実した日々であったようだ。今、ハーンが暮らした家は「ヘルン旧居」として北堀町に残るが、居住した期間は短く、大半の10ヵ月ほどを宍道湖畔の宿で過ごした(初めは今の大橋館、後、なにわ本店)。また、当時は水上交通が主要交通手段となっており、出雲大社や一畑薬師に出かける際に何度も宍道湖上を航行している。我々は今その時の様子を、ハーン著『知られぬ日本の面影』の中の「神々の国の首都」「杵築」「さようなら」で知ることができる。

宍道湖周辺の風景が詳しく、愛着をもって記述されている。

その視点は、日本駐在の外国人記者のものであり、客観性と紀行性を備え、当時の日本人であれば当たり前のこととして省略してしまっているような点についても詳述している。当時から見れば外国人のようになってしまった現代の日本人にとって、その感覚や心情は一層理解しやすくなっていると思える。

原英文は、生活や民俗、風習、怪談と実に内容豊富だが、それゆえに分量は膨大である。また、既に失われてしまった事物も多いので、ハーン自身や当時の民俗にさほど興味のない人にとっては退屈の感もなきにしもあらずである。しかし、宍道湖の叙景に関わる部分は現在でも十分通用するどころか、松江に関わりのある文学者のうち誰よりも丁寧に描写している。

つまり、それらを抽出して読みやすく、携帯に便利な「風景ガイドブック」とするところに筆者の狙いがあった。その際、既存の翻訳では表現がやや古い点や直訳に過ぎる点を改め、宍道湖の風景を目の当たりにして実感できること、違和感のない訳とすることに主眼を置いた。

### <目的と方針>

- ①宍道湖の叙景を抽出する。
- ②今の宍道湖の風景を前にして実感できるものとする。

### <違和感のない訳語>

Ex. the long white bridge → 大橋

※当時は白く塗られたトラス橋が架かっていた。

a long-legged centipede of the innocuous kind → ムカデ  
queer → 訳さず (直訳：風変わりな)

以下、拙訳の一部、宍道湖の夕日の叙景を載せる。

太陽が沈みはじめると、水と空に驚くべき美妙的な淡い彩りが現れる。

動きのない濃い紫色の雲が、のこぎり歯状をした藍色の山並みの背上部に広がっている。もやがかかった紫は、ほのかな朱色とにぶい金色の中に煙りながら衰え、まぼろしに紛う緑を経て再び空の青に溶け込む。はるか遠くの深い湖水は、いいようもないほのかなすみれ色となり、松の影差す嫁ヶ島のシルエットは柔和な色の海に浮いているように見える。しかし、近くの浅い場所は、水流によって線が描かれたようにくっきりと深みから切り離される。そして、その線の手前側の湖面は青銅色にきらめく。古い赤みがかかった金銅色を加えて。

すべての微妙な色合いは五分ごとに変わる。高雅な玉虫色のシルクの色調と陰影のような驚くべき変化と移ろいである。

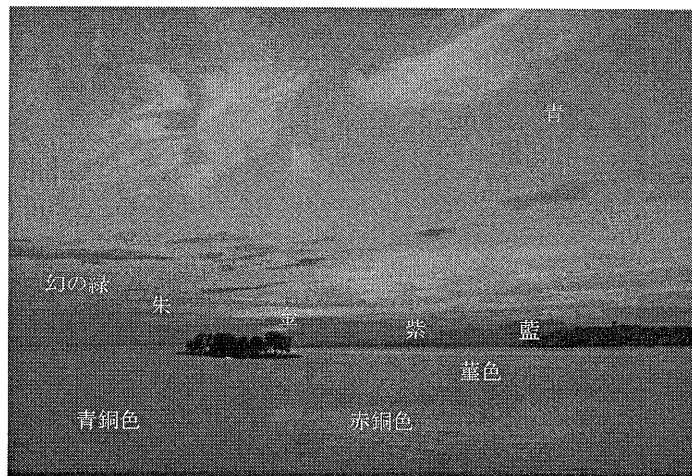


写真1. 宍道湖夕景

おわりに

前掲の3冊の本に前著『宍道湖風景考』及び「宍道湖の風景写真」を加え、「ホームページ：宍道湖の風景サイト」として昨年11月末より公開している。

関心のある諸氏の訪問を待っている。

<http://www.web-sanin.co.jp/p/semeru/fukei.html>